

# 現役教師ですが “教育”について こんなことを考えてます。

—これからの教育を担う人たちへ—



受験生にとって聞けそうで、なかなか聞く機会がないのが現役教師の教育観。  
毎月1つのテーマを取り上げ、先生方の考えを聞いてみました！

## 今月のテーマ：障害と出会って

今月のテーマは障害。ある日突然病に襲われ、障害が残ると、生活が一変します。その後のリハビリは辛く、社会復帰まで苦しい日が続きますが、石井先生はそこから大きな経験を得たようです。

著 石井伸一

千葉県市川市出身。公立小中学校PTA会長などを務めた後、現在、千葉県八千代市教育委員会教育委員(教育長職務代理者)。

## あの日を境に生活が一変した

2018年秋、出かける支度をしていると突然手足に力が入らなくなり、床に崩れてしまいました。妻を呼ぼうとしても、大きな声が出ず、呂律も回りません。まずい、脳梗塞になったと思いました。異変を感じた妻がすぐにかけて、救急車を呼んでくれました。病院に着けば詰まった血管を治療してもらえ、発症から時間も早かったので軽くてすむな、と軽く考えていました。病院に着くと安心して寝てしまい、CT撮影や治療して頂いたことなど何も記憶がなく、次に目を覚ましたときには、家族や友人がベッドを取り囲んでいました。ここまでが倒れた当日のことです。ここから3週間は発熱などもあって意識が混濁し、ほとんど記憶に残っていません。

ドクターの説明によると、脳内出血で出血部位は視床出血、命の危険は脱したが、意識障害や運動障害、感覚麻痺や言語障害などが起き、ベッドから起きることも難しいかもしれないということでした。自分の置かれている状況が分かったときは、正直なところとても落ち込みました。

あの日を境に生活が一変したのは私だけではなく、

私の家族も、想像すらしたことのない状況に一瞬にして置かれました。仕事や家族のことを一人で背負っているにも関わらず、毎日笑顔で病院に来てくれる妻や、妻の支えとなっている長女、手術したばかりの足を引きずり泣きながら仙台から飛んできた次女。妻から、毎日のように顔を見せてくれた兄貴のような「心友」、その他たくさんの方々に応援して頂いたことを聞き、下を向いている場合ではないと思いました。

## 「歩いて家に帰る」という最高の目標

約1ヶ月救急病院にお世話になり、リハビリ病院に転院することができました。毎日4時間リハビリができるということで、必ず社会復帰するぞと心に誓ったのを思い出します。しかし、約1ヶ月の入院で体重は105kgから80kgに落ちていました。体重が落ちるのは嬉しかったのですが、体中の筋力もガタ落ちで、車椅子に長く座ってられない状態でした。

リハビリ初日、そんな私にリハビリの先生が、「みんなで一緒に頑張りましょう。そして必ず歩いて家

に帰りましょう。」と声をかけてくださいました。ベッドから起きるのも難しいと言われていましたが、「歩いて家に帰る」という最高の目標を持たせてくれたことで、辛いリハビリも前向きに取り組むことができました。

そして楽しい仲間たちとの出会いが、暗くなりがち入院生活を楽しく明るいものにしてくれました。一人一人症状の違いはありますが、良いトレーニングがあれば教え合い、辛いリハビリをしていれば応援し、麻痺に改善が見られれば心から拍手を送る。一人では心が折れそうなきも仲間がいるのはとても大きな支えとなりました。

この間まで見ず知らずの者同士が、お互い支え合い一緒に戦えることは、私にとってとても大きく大切な経験となりました。病気にならなければ、このようなかけがえのない経験はできなかったと思います。

## 教育長からの思いも寄らないお言葉

私は、教育委員をさせて頂いております。

この病気で倒れてから、歩けない、手が動かない、言葉もハッキリしない。この様な状態で教育委員を続けることはできないと思い、教育長に辞意を伝えました。

すると教育長から「今は車椅子に乗っている。車椅子だから見えるものや感じられることがあり、今の石井さんだからこそ、考えられることがあると思う」と思いも寄らないお言葉を頂きました。そしてご一緒している委員の皆様からも、「焦らずにリハビリをして、また一緒にやりましょう」とおっしゃって頂きました。

障害者になったばかりの私には、人前に出る事など想像すらしていませんでした。多くの方々に迷惑をかけてしまうのでは、と心配が先に来てしまい一歩が踏み出せずにいたのです。

一歩踏み出したい思いと、迷惑をかけたくない思いで本当に悩みましたが、「車椅子から見て、感じて考えよう」と思い、委員を続けさせて頂く決意ができました。

心のどこかで障害を受け入れられない私でしたが、この件を境に前向きに障害を受け入れるようになった気がします。手足の障害は時間がかかりそうですが、言語障害は何とかなりそうな気がして口のリハビリに励みました。その甲斐あって、1ヶ月後の委員会には出席することができました。病院でスーツに着替え、介護タクシーで向かうときの気持ちは、今でも鮮明に覚えています。障害者として社会復帰の一歩を踏み出せたのは、とても大きな自信になりました。

## 「ただいま、障害者になって帰宅しました」

リハビリ病院に入院した当初は、手も動かず立つこともできませんでした。リハビリのお陰で手も動き出し、足ももう少しで車椅子から卒業できるという見通しが見えてきました。7ヶ月に及ぶ入院生活最後の夜、嬉しさが込み上げると思っていたのですが、仲間を残して先に帰宅することの方が辛く、寂しい夜になってしまいました。

この病に倒れて、今まで以上に人の温かさや優しさを感じる事ができました。人は一人で生きてはいけないし、決して一人ではないということ、身をもって感じました。

「ただいま、障害者になって帰宅しました。まだ一人でできないことがたくさんありますから、よろしくをお願いします。」

「うちのリハビリは厳しいから覚悟して、逃げ出さないでね。(笑)」

このように、いつでも明るく勇気づけてくれる家族と共に、目標を一つ一つ達成していきたいと思っています。

### 今月のまとめ

- リハビリを通じて、見ず知らずの者同士が支え合い、一緒に戦えることは、とても大きく大切な経験となった。
- 病に倒れ、人は一人で生きてはいけないし、決して一人ではないということ、身をもって感じた。